

保育所保育指針改定に向けた要望

平成 28 年 5 月 10 日
公益社団法人 全国私立保育園連盟

保育所保育指針の改定に向けては、乳児期からの発達連続性に鑑み、また子どもの権利条約を日本が批准したことによる世界に向けた態度表明として、とくに次の事項が重要であると考えます。

1. すべての国民は、生まれながらにして教育される権利がある。
2. 乳幼児に対する教育は、子どもの最善の利益が最も大切にされることが優先課題である。
3. すべての乳幼児は、その発達において、今を大切にされ、自分らしく生きる権利がある。
4. 乳幼児は、人格、才能並びに精神的及び身体的な能力をその可能な最大限度まで発達が保障される権利がある。
5. 乳幼児期は、生涯にわたっての教育の基礎を培う最も大切な時期であり、決して学校教育の準備期としての教育であってはならない。ただし、人生の出発点をより強固にするために、その後の学校教育との接続を大切にすることが必要である。
6. 乳幼児期は、人として生きていくための意欲、探究心、社会の一員である意識、コミュニケーション能力、身体的機能の調和的発達、自律と自立などを身につけていくことが課題である。
7. 乳幼児期における教育は、環境を通して行うことを基本とし、教育のために乳幼児にとってのよい環境を用意しなければならない。
8. 乳幼児は、自分に影響する事項について自由に自己の意思を表明することができ、自分に関係する事項については、その策定において参画することができる。
9. すべての乳幼児においての尊厳を大切にされ、自立を妨げることを排除する。
10. ここでいう乳幼児とは、生まれてからおおむね 8 歳までと定義する。

以上

●最近の研究において、乳児からの教育の重要性が提案されています。それは、「新生児は『能力のある乳児』としてこの世に生まれてくる。」「子どもは誕生の瞬間から自分の発達について積極的に働きかけている。」「すべての子どもは、その個性とそのらしさにおいて、他の子とはちがっている。」「子どもは権利を持っている。」と考えるようになってきたからです。

●今回の改訂会議の第2回に示された「幼少期における脳の感受性」によれば、「幼少期からさまざまな脳機能を発達させる環境を充実させること」が重要であることを示しています。その時期における「量を拡大し、受け入れ体制を整備することを前提として、子どもに高い質のECECの機会を提供することが極めて重要であるという指摘に対して、この重要性を明記すべきです。

●質の高さに特徴として、英国におけるEPPE調査において、「保育者と子どもの言語的かわり」「カリキュラムに関する知識と理解」「乳幼児がどのように学ぶかに関する理解」「子どものいざこざ解決を支援するスキル」「子どもたちの家庭学習を行なう保護者への支援」の五つの領域が示されています。それらをどこかに入れることが必要であります。

さらに、3歳までの高い質の保育として「言葉の使い方（質問、応答性、その他の言葉がけ）が重要である事を明記し、さらに、保育者との良好な関係（温かく、応答的であること）の重要性、さらに、「子ども主導の遊びや活動、子どもが中心で教師がつなぎ、発展させる遊びや活動が多きという特徴があったことを踏まえ、そのような具体的な保育方法を明記すべきです。

●ヒト族の中で、協力することで生き延びてきたのは、私たちの先祖である「ホモサピエンス」です。「人間は、協力し合うことで生き延びてきた生き物」であるということが、最近の研究でわかってきました。そのために、「協力をする」という基盤を持って生まれてくるのです。そして、その力を、教育システムに取り入れた結果、高い学力を持ってきたと分析しています。そのために、共感をはじめとする非言語コミュニケーションのころを大切にすることが必要であることを明記すべきです。

●「幼児期の教育と小学校教育の円滑な接続の在り方に関する調査研究協力者会議」の報告書において、「幼稚園教育要領、保育所保育指針と小学校学習指導要領における発達の段階に配慮した違いが示されています。そこには、「幼児期の教育が、幼児期の教育の修了までに育つことが期待される生きる力の基礎となる心情、意欲、態度などについて、「～を味わう」、「～を感じる」などのように、いわばその後の教育の方向付けを重視するのに対し、児童期の教育は、「～ができるようにする」といった具体的な目標への到達を重視する」という違いが書かれてあります。

また、「こうしたことは、幼児期の教育が幼児の生活や経験を重視する経験カリキュラムに基づき展開されるのに対し、児童期の教育が学問体系の獲得を重視する教科カリキュラムを中心に展開されるといった違いにも現れている。これらの違いは、発達の段階に配慮した違いである。」また、

教育課程の構成原理におけるこうした違いによって、内容、時間の設定や指導方法等の顕著な違いを示しています。そこには、「幼児期の教育は環境を通して行うこと、つまり幼児を取り巻く人的（教職員自身も含む）・物的要素全てを通して幼児を導くことで、幼児の生活や経験からの学び、自発的な活動を重視している。これにふさわしい指導方法が遊びを通じた総合的な指導である。幼児期における遊びとは、余暇活動ではなく、学びそのものであり、幼児が遊び込むことができる環境（学びに深さと広がりをもたらす環境）をいかに構築するかが教職員の指導における重要な課題となる。幼児が遊び込むことができる環境を構築し、幼児の主体的な活動を促す教職員の適切な援助があれば遊びは深まり、遊びの中で幼児は自分の課題を発見・追求するようになり、子どものもつ課題意識は高まっていく。」とあります。一方、児童期の教育においては、「教科カリキュラム等の実施のため、各教科等から構成される時間割に基づく学級単位の集団指導が原則となる。ここでは、教員が教育すべき内容を具体化し効果的な指導を行うことにより、児童が目標に到達することができるようにすることが重要な課題となる。」とあります。どうも、これらの違いがあるにもかかわらず、教育であるということから児童期の教育と混同しているところが見られます。そこで、その特徴を明記すべきではないかと考えます。

以上